



藤島武二《噴水》1906-7年

## ことば 129

画家にとっては一つの色彩も一つの描線も生命に置き換えられるものである。

藤島武二（「足跡を辿りて」、『美術新論』第5巻4、5号、1930年4、5月）

## 「20世紀アート120」と

### 「藤島武二のスケッチ100」について

田中 淳

#### 大川美術館の20世紀のアート

この度、「20世紀アート120」と題して、当美術館のコレクションによって20世紀という時代の美術を紹介してみることにしました。

20世紀の100年間の美術をどのようにみるのか、21世紀となり20年以上たった現在にあっては、すでに数多くの出版物や展覧会などで総括され、また教科書的にまとめられています。その概略を記せば、一枚の白いキャンバスを前に、何を、どのように描くかという問いかけは、20世紀になっても続いていたといえます。ただ20世紀になって、キャンバスを前にした画家たちの実験、思索は、大胆に、そして時代をへるごとに目まぐるしいものになっていきました。二次元の平面にすぎない絵画によって、三次元の現実をどのようにとらえるのか、そこからキュビズムが生まれ、さらに現実の再現をはなれて線と形だけの抽象絵画まで行きつくのです。しかも一方で、絵画そのものを問う、さらに芸術そのものを問う動きが出てきました。未曾有の破壊をもたらした近代戦としての第一次世界大戦後には、従来の芸術の枠を否定するダダイズムがおり、また人間の心理、精神という未知の領域にまで踏みこんだシュルレアリスムも生まれています。さらに絵画のなかに、画家個人にとどまらず、人間全体の問題、さらに、たとえばプロレタリアートのように、現実としての政治、思想、社会問題等を持ち込む動きも活発になっていきました。これらは、20世紀のはじめの四半世紀の間におこったことにすぎません。さらに第二次世界大戦をはさんで、さまざまな思想、主義、運動がおり、20世紀アートは、継承、拡大、一方で解体、否定、破壊の連続だったといえるでしょう。

さて、こうした20世紀アートを前にして、もとより当美術館のような個人の収集によるコレクションでは、当然ながら個人の趣味、嗜好が色濃く反映されるために、網羅的で、教科書的な展示はのぞめません。しかしながら、20世紀アートの一面という事実と、またひとつの個性がとらえた歴史的な流れとしてご覧いただくことはできるの

ではないかとおもいます。そこで、当美術館の個性として、「第一部：エコール・ド・パリとアヴァンギャルド」、「第二部：アメリカン・シーンの画家たち」というように構成し、精選した120点を展示しました。これは、当美術館の創設者大川栄二（1924-2008）が、そのコレクションを松本竣介（1912-1948）の作品をきっかけにはじめたことと無関係ではありません。竣介が影響を受けた藤田嗣治（1886-1968）や同時代のパリの画家たち、そしてアメリカで学んだ野田英夫（1908-1939）からはじまって、野田と同時代のアメリカの画家たちへと枝をのばして豊かな葉をつけていったからです。

#### 20世紀の画家藤島武二

この「20世紀アート120」の同時開催として特集展示「藤島武二のスケッチ100」もおこないます。100点におよぶ展示作品は、藤島武二（1867-1943）の半世紀以上にわたる画業を、各時期の特色を見るうえで、たいへんバランスよく集めたコレクションになっています。この特集展示のサブタイトルを「画家が歩んだ明治・大正・昭和」としました。日本の元号をつかって、その長き画業をものがたろうとしたのです。しかし、元号を外して、西暦で見れば、藤島もまた20世紀アートのなかの画家といえます。そこで藤島と同世代のヨーロッパの画家をさがしてみると、マチス（Henri Matisse 1869-1954）がいます。藤島とマチスという、唐突な比較になってしまうでしょう。しかし、20世紀初頭という同じ時代にセザンヌなどのポスト印象派の画家たちの回顧

展をパリでみて触発されたことがわかり、直接の接点はないとはいえ、興味がつきません。藤島は、東京で西洋画を学び、東京美術学校の助教授となって、ヨーロッパ留学をするのが



マチス「ひざまずいた裸婦」1927年

1907年（明治

40)年のことでした。一方、マチスは、この当時、すでにフォーヴィスムの画家としての評価を得ていました。

今回の「20世紀アート120」には、マチスの「ひざまずいた裸婦」(1927年)が展示されています。これは、マチスの1920年代のニース滞在時代に描かれたデッサンです。この時代には、「オダリスク」と題された作品が多く描かれています。マチスはオスマン帝国の君主のハーレムに使える女性に見立てて、モデルの豊かな肉体を表現することに関心をよせていたといわれています。いわば、マチスのオリエンタリズム(東洋趣味)なのです。

また「藤島武二のスケッチ100」のなかには、「扇を持てる裸婦」(1929年頃)というスケッチがあります。藤島は、1920年代から30年代にかけて、朝鮮半島、台湾、中国などアジア各地をおとずれ、風景や現地の女性を描いています。このスケッチが、どこで描かれたかは不詳ながら、扇もっている姿からは、やはりアジア的な嗜好が感じられます。つまり日本のオリエンタリズムといえるのかもしれませんが。このように、マチスと藤島の1920年代のオリエンタリズムという視点から比較することもできるのではないのでしょうか。これは、ひとつの見方にすぎませんが、今回の二つの展示から、みなさんにはさまざまな視点から鑑賞していただけるのではということで提案させていただきました。どうぞご覧ください。

(大川美術館 館長)



藤島武二  
「扇を持てる裸婦」  
1929年頃

## 戦後の桐生の美術

宮地 佑治

昭和24(1949)年桐生美術協会は創立された。中心となった箕輪初太郎(文化祭史執筆者・一線美術会設立に参加)は当時39歳、オノサトは37歳、笠木実(春陽会会友)23歳、深井清市(旺玄会)23歳、丸山実(旺玄会)18歳であった。皆若かった。

群馬県美術会は翌25年に第一回展をひらいている。昭和30年迄の入賞者をひろってみる。

### 第一回展

森村惟一(教育委員会賞)

小林源次(一陽会会員)(毎日新聞社賞)

中曾根信雄(桐高教員)(毎日新聞社賞)

### 第二回展

森村惟一(文部大臣賞)

### 第三回展

中沢清(教育委員会賞)

有村真鐵(美術協会賞)

### 第四回展

大橋正夫(上毛新聞社賞)

### 第五回展

有村真鐵(教育委員会賞)

杉戸信雄(読売新聞社賞)

### 第六回展

鈴木正三(県議会議長賞)

大橋正夫(読売新聞社賞)

宮地佑治(奨励賞)

昭和27年県美術会に造反があって一部会員が教育委員会という行政の権威をはなれて群馬美術家連盟を結成する。箕輪初太郎が連盟展の設立に参加し、以降桐生の一線美術系のグループは現在迄も連盟展に所属している人が多い。Qの会の中村善一は反権威の立場を明言して連盟展を選んで出品していた。彼は同時期、理想の美術教育を目指して西中学校の教師を退職して「らくがき絵画教室」を開塾している(山口晃も子供の頃ここで学んだと聞いている)。

県展第三回展で最高賞を受賞した中沢清の絵は全く非形象(ノンフィギュラティブ)であって、このたぐいの絵としては当時はじめての受賞だった。彼は図書館からかりて「近代絵画」(オザンファン・ジャヌレ共著)を読んでいた。この本の中に



昭和26年頃の珍竹林画廊で開催された展覧会の案内はがき  
資料提供：宮地さん

絵画の究極の使命がかかっている。「絵画は一定の秩序の中に形態と色彩を結合して作り上げられた純粹創造である。…そして芸術は我々の詩的感情〈詩的精神（リリズム）〉の欲求に満足を与えることが唯一の目的である…」とある。この言葉は中沢の詩についてのメモ「詩人の課めは詩的美の世界を作ることである。それ以外にはない」という言葉とよくひびきあっている。また、戦後美術の行方を指し示している。彼は22歳（昭和29年）で亡くなっている。オノサトは「訪れた若者達の中で一番面白かった」と云っていた。

当時、新しい絵画の理論書は殆どなく、もしあっても私達には買えなかった。中沢にピカソの青の時代がどうのこうのと言ったら、絵は理屈でみるものではないと激怒された。というわけでもないが、私は絵はみても解説は殆ど読んでいなかった。中で写真誌ライフの美術特集はありがたく（古本屋で20円位で買った）セザンヌやミケランジェロ、ジオットの特集には今もって衝撃を受けつづけている。

オノサトの帰郷以後、桐生の美術界にはいろいろな恩恵があった。手元に第二回群馬自由美術展（高崎珍竹林画廊）のハガキがあるが（多分昭和26年）県出品者23名のうち桐生地区からは9名いる。（有村、大橋、野村潔〔黒田オサムの本名〕、佐藤一郎、新井盛治、宮地、東宮鐵太郎、

オノサト夫妻）これはオノサトが桐生在住でなければあり得ない。ちなみに、この時の賛助出品者は井上長三郎、森芳雄、末松正樹、麻生三郎、難波田龍起、鶴岡政男等であった。前橋・高崎地区からは小林良曹、松本忠義、豊田一男等が一般出品者であった。

昭和29年1月桐生図書館で保倉一郎の主催で「若い画家展」が開かれた（オノサト夫妻、有村、渡辺、保倉、玉川利子、黒田、宮地、他一名が出品）この展覧会名はオノサトにほめられた。

同年6月、久保真次郎コレクションの西洋版画展と日本の若手作家（瑛九、加藤正、利根山光人、泉茂）の版画の展示即売会展が織物会館の一階と二階を使って開催された。瑛九の四号程のエッチングが千円だったと覚えている。会場で瑛九らと美協関係者が座談会をひらいていて私も参加した。

同じ29年にオノサトを慕って集っていた有村を中心にしたグループ10（テン）展が桐生倶楽部でひらかれた。瑛九・植村鷹千代が来桐した上に、一点一点批評してくれている。（出品者、新井理夫、新井盛治、有村、宮地、オノサト夫妻、大橋、加藤武志、中村善一、黒田オサム以上10名）。翌昭和30年、神田タケミヤ画廊で第2回展を開催している。

この昭和30年をもって戦後桐生美術のひとぎりとしたい。

オノサトは昭和31年に教師をやめ画家に専念しはじめる。学生美術連盟の仲間はそれぞれ進学して桐生に在住しなくなるなどがある。しかし



1950年頃の写真誌「LIFE」資料提供：宮地さん

20年代と30年代は繋がっているわけで、昭和42年になってシマ画廊が開設されたことは嬉しく大きいことであった。そこで奈良彰一（鈴木正三の教え子）の開催した企画展は目をみはるようなものが多くあったが、(世界版画秀作展、オノサト展、瑛九展、アイ・オー展) アンディ・ウォーホルの版画と映像は忘れられない。地方では望むべくもない良質な展観であった。また、画廊中心とした数多くの文化交流は濃密な時間を我々にもたらしてくれたし、成果もあった。山鹿英助と島勝二の交流は島霞谷・隆夫妻の業績発見につながっている。

オノサトは全国から何人かの若者を桐生や近辺に呼びよせている。東宮鐵太郎（オノサトの甥）、中西聰（中西夏之の弟）館林の美術家・下川勝等はオノサト宅で紹介をうけて友人となった。有村真鐵、渡邊保、石井克等とはオノサトを尊敬する仲間達である。Qの会の人達との交流も私にはオノサト抜きには考えられないのである。

以上、私的な話が多くて恐縮しています。

#### 参考文献

- 箕輪初太郎 桐生文化祭史（昭和45年発行）  
 吉田富久一 群馬における戦後・前衛美術運動の軌跡と行方  
 島勝二 願望の旅（せせらぎ叢書第三巻）  
 第40回記念群馬県美術展 カタログ  
 中沢清遺作集・「みしらぬ友」  
 オノサト・トシノブ展（大川美術館 企画展No.65）  
 オノサト・トモコ  
 オノサト・トシノブ伝  
 桐生美術協会 30周年記念作品集

宮地佑治さんによる「戦後桐生の美術」は、本号が最終回です。

原稿とともに毎回貴重な資料をお寄せくださった宮地さんに心よりお礼申し上げます。

ありがとうございました。

（編集子）

#### 【研究ノート】

### 北川實による松本竣介宛葉書1

小此木美代子

#### はじめに

このほど松本竣介次男・松本莞氏のもとに、北川實から松本竣介に宛てた葉書16通が発見された。葉書16通は、調査研究を前提に現在当館で預からせていただいている。本欄では、松本莞氏のご了解のもとこれら16通の書簡を年代順に紹介する。

まず、その全体像を竣介側からとらえてみると、東京市渋谷区（現在の渋谷区神宮前）に家族とともに住まっていた佐藤俊介時代である1935年のものが2通、結婚を機に下落合に自宅兼アトリエを構え、妻・禎子とともに『雑記帳』の編集に奔走していた1936-37年のものが13通、これに、やや厚手の紙に活版印刷された1938年1月1日の年賀状が1通である。

北川實の戦前までを概観しておこう。北川は、現在の広島県府中市に生まれ、1911年3歳のときに福岡市在住の叔父の養子となり、その後14歳で叔父の経営する日本製鉄所八幡工場に製図工として入社した。この頃、町の研究所に通い油彩画を学び、その後、1925年に17歳で上京。本郷絵画研究所で松本弘二に指導を受けた。1941年には『新女苑』に連載された井伏鱒二の小説「青苔の庭」の挿絵を描く。1930年代は、二科会で活躍した洋画家・野間仁根に師事したとされ、野間のフォーヴィスム的な画風の影響が指摘されてきた<sup>[註1]</sup>。

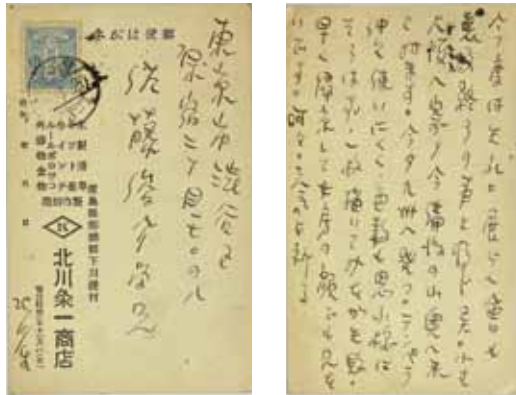
1929年に盛岡より上京して谷中の太平洋画会研究所に通いはじめた竣介とは、写真資料<sup>[註2]</sup>によっても早くから交流が始まっていることがわかる。しかし戦前の北川の動静については、いまだ不明な点が多い。そうしたなかでこの葉書16通は重要な資料である。北川と竣介との関わりをこれらの葉書を通じて検討することで、双方の空白期を埋めるの一助になるのかもしれない。

なお、現在までに見つかっている北川が竣介に宛てた書簡は、今回発見された16通のほかに、戦後の1946年1月消印のものが一通ある<sup>[註3]</sup>。北川と竣介の関係が長期にわたって密接なものであったことがうかがわれる文面であった。

今回は1935年6月20日をとりあげる。こちらは16枚のうち唯一「北川条一商店」の社判が印字されている。

## 【北川實書簡

松本竣介宛 消印1935年6月20日】



今度は失礼。展らん會も無事終了の事と存じ候。小生大阪へ寄り今備後の山奥へ来てゐます。今夕九州へ発つ。テンペラ仲々使いにくく、色数も思ふ様にそろはず、一枚描いてみたが失敗。早く帰京して女房の顔でも見たいです。呵々。元気を祈る

北川条一は北川実の実父である。北川實は、3歳のときに福岡の叔父の養子になるが、このような社判入りの葉書に自身の名を添えていることから、実家の事業になんらかのかたちで携わっていたのであろうか。

文面は、「今度は失礼。」から始まる。北川は竣介に、大阪を経由し、今は郷里である備後（現在の広島県府中市）に来ていて、展覧会の終了を見届けられず失礼したことを伝えている。さらにこの夕には九州に発つという。「九州」とは叔父の元だろろうか。これもまた断定できない。なお、北川のこうした移動は16通の葉書を通読したかぎりでも数度あり、その都度竣介に帰京した旨を伝える葉書を出している。北川が東京を離れて多忙にしているその用事が何であったのかはやはり不明である。

北川は、「展らん会」を「今度は失礼。」したこと、無事終了したであろうことを気にかけている

が、この「展らん会」については、当時北川が経営していた谷中の茶房・り、おむ<sup>[註4]</sup>で6月10日から17日の会期で開催した「佐藤俊介・北川實第2回洋画小品展」の可能性が考えられる<sup>[註5]</sup>。

また、北川は、テンペラによる制作を一枚試みたものの失敗したと竣介に伝えている。文面からは先んじて両者間でテンペラについての話題がのぼっていたことがうかがわれて興味深い。

大阪、広島、そして九州へと、忙しく移動するなかにあっても、新たな制作に励む北川の近況が伝わってくる情報量の多い一通である。

（当館学芸員）

註1：北川實の略歴は以下を参照した。

- ・谷藤史彦編『北川実年譜』『北川実回顧展』北川実回顧展実行委員会、2001年、pp.47-48
- ・寺口淳治編『関連年表』『無辜の絵画 鬨光、竣介と戦時期の画家』国書刊行会、2020年、pp.314-323
- ・宇多瞳『[作家解説] 北川實』『無辜の絵画 鬨光、竣介と戦時期の画家』国書刊行会、2020年、pp.258

註2：太平洋画学校時代の写真で、竣介、鶴岡政男、北川實、長谷川利行がくつろいだ様子で畳の上で並んで撮影されたスナップ写真がある。撮影者は不明。

註3：『【研究ノート】松本竣介の蔵書から①松本竣介宛北川實葉書をめぐって』（大川美術館ニュース『ガス燈』第121号、2019年、pp.35）において、松本竣介の蔵書（『雑記帳』）に挟まって発見された北川實から松本竣介に宛てた1946年1月18日消印の葉書についてとりあげた。詳しくはこちらを参照されたい。

註4：北川實が経営した茶房り、おむについては、「茶房り、おむ」をめぐる断章—松本竣介、北川實を中心に』『無辜の絵画 鬨光、竣介と戦時期の画家』国書刊行会、2020年、pp.153-166を参照されたい。なお、ここでの「り、おむ」のひらがな表記は、「茶房り、おむ」が発信元の案内状および目録の印刷の表記に従った。

註5：1935年の佐藤俊介の展覧会歴（柳原一徳編「展覧会出品記録」『生誕100年松本竣介展』岩手県立美術館他、2012年、pp.370-371参照）を以下にあげておく。

- ・1月7日-19日 第5回NOVA美術協会展（東京府美術館）
- ・4月7日-7日 佐藤俊介・北川實第1回洋画小品展（谷中・茶房リリオム）
- ・6月10日-17日 佐藤俊介・北川實第1回洋画小品展（谷中・茶房リリオム）
- ・9月3日-10月4日 第22回二科展（東京府美術館）
- ※《建物》初入選
- ・10月1日-5日 佐藤俊介氏油絵小品展（谷中・茶房リリオム）
- ・12月22日-26日 佐藤俊介氏洋画小品展（谷中・茶房リリオム）

## 広島市現代美術館所蔵作品を中心に Part.2 「70年目の原爆の図」展を終えて

小此木美代子

### はじめに

本年1月16日から3月14日まで開催した「広島市現代美術館所蔵作品を中心に Part.2 70年目の原爆の図」展は、1951年以後全国に拡大していった丸木位里・俊夫妻による《原爆の図》三部作巡回展が、桐生においても公開されたという史実に光をあてようとする展覧会でした。そのため本展では、1951年2月、桐生での巡回展会場となったモリマサ百貨店で《原爆の図》を見た方々の証言を集めることも展覧会の趣旨のひとつとしました。

開催にむけた準備段階より、桐生市内を中心に情報提供を呼びかけてまいりましたが、展覧会開幕時では3名の方からの聞き取りにとどまりました。(本展カタログに所収) その後、地元紙の呼びかけもあり、これまでに桐生市在住の4名の方より貴重なお話をうかがうことが出来ました。

本欄では、これまでに当館にもたらされた証言や資料より、その一部を紹介します。

### 70年前の《原爆の図》

今回、語ってくださった4名の方は、70年前は小学校高学年、もしくは中学生であった方々です。10代の頃の一時間にも満たない鑑賞体験は、このような機会がなければ思い出さなかったといえます。当時の記憶を思い起こし語る。そこには70年の時が重なり、現時点での感想や思いも自然補足されるものでしょう。皆さまは「なにぶん子供時代のことですから、思い違いもあるはず」と前置きをされつつ、ぼつぼつと語り始めてくださいました。今回の聞き取りは、一堂に集まっていた全員で語り合うスタイルではなく、当方が個々にお目にかかるか電話にて、下記の3つの質問を同じように投げかけるかたちで行いました。

- ・展覧会をどのように知ったのか
- ・当時「原爆の図」を見た印象
- ・会場の風景で思い出されること

以下、まとめて列記します。

「担任の先生が美術の先生に教えてもらって見に行ったように思います。その光景は今でも鮮明に思い出せます。「真っ黒くてとにかく大きな絵」という印象が強いです。真っ黒い人々が重なり合っ山のようにになっている絵、そういう絵があり、その一点がとても印象深かったです。恐ろしくて怖くて会場をそれ以上先に進むことが出来ず、途中まで

見て一緒に行った同級生の女の子とふたり、手をつないで無言で階段を下りて帰りました。家に帰ってから家族に「原爆の図」を見たことを話すことができなかった、それほどショックを受けていました。会場は自分たち以外に人がほとんどいなくて静かで閑散としていたように記憶しています。あの時にみた「原爆の図」のことは、以後大人になってから特に思い出したりする機会もありませんでした。また、その後「原爆の図」をみに出かけることもありませんでした。今日こんなふうにあの時感じたことをお話しすることが出来て、長年の胸のつかえが取れたような気がしています。」

(1938年生まれ女性)

「美術の先生から聞いて同級生と二人で見に行きました。私たちが行ったときは、会場には人がほとんどいなかったように思います。とてもひろく感じました。もしかしたら、本当は会場に人がもっといたのかもしれませんが、絵のインパクトが凄くて、まわりの人たちの様子には意識が向かなかったのかもしれませんが、それほど絵が衝撃的だったということなのでしょうね。見に来ている人たちもみんなそんな風に絵に対峙していたのだと思います。展覧会を見終えて、二階の階段を降りて来て外の道路に出た時、外が明るくて空気がとてもおいしく感じられたことを、とにかくよく覚えています。」

(1936年生まれ女性)

「自分から進んで街（当時、桐生の本町通りは市内のなかでも特に「お街」という感覚で、華やかさのある場所であったそうです）に出て行ったり、ましてや展覧会なんて見に行くような子供ではなかったから、たぶん学校の授業とか校外学習みたいな



《原爆の図》の前で語る皆さま

ことで、団体に連れていかれて見たのだと思います。会場は人が多くて小学生の自分は大人の背中越しに絵を見ていたように思います。」

(1940年生まれ男性)

「学校から歩いて行った記憶があります。クラス単位だったか学年単位だったかは覚えていません。

強烈な印象でその日はご飯を食べられませんでした。午前中に見に行き、午後は感想文を書きました。ただ、私は、その会場はモリマサ百貨店ではなく、織物会館で見たように思っていました。子供心に恐ろしい絵がとにかくたくさん壁に張ってあったという印象です。」 (1941年生まれ女性)

### モリマサ百貨店

巡回会場となった桐生市本町5丁目のモリマサ百貨店はどのような場所だったのでしょか。

1950年代初頭、桐生美術協会の展覧会などに利用されたことは、資料により明らかになっています。しかしその店構えや店内の様子が、じっさいどのような風景であったのか、写真資料は非常に乏しいものでした。

これについては、市内の郷土史家・川嶋伸行氏により、桐生高等工業高校の卒業アルバムにおさめられた1940-41年当時の写真を提供いただきました。資料によれば、モリマサ百貨店（当時は「モリマサ」とだけ表記）は、1938年頃の創業とされます。戦前には、衣類や雑貨を取り扱い、物資不足となった戦後まもなくの頃には、各種展覧会の会場として使われ、1951年の「原爆図三部作展覧会」開催のの数年後には、呉服店「ミハシ」となり、まもなく「さくらや」となり現在に至っているということです。同住所の店舗の変遷の歴史が、川嶋氏の調査により明らかになりました。（川嶋伸行「モリマサ百貨店」『きりふ 明治・大正・昭和』第105号、2021年2月20日）

ここに紹介する写真3枚は、いずれも戦前のものですが、桐生市本町通りの街の賑わいのなかで「モリマサ」がひととき大きくモダンな看板を掲げていたことが確認できます。



モリマサ百貨店店内(1941年)



上:夜の桐生本町通り(1941年)

下:モリマサ百貨店正面(1941年)

写真提供:川嶋伸行氏

### 聞き取り調査を終えて

1951年の桐生での原爆の図巡回展について、語ってくださる方は、じつのところもっといらっしゃるのではないだろうか、とは、今回の聞き取り調査を終えて率直な感想です。その方々に、当方がただ辿りついていないだけではなかろうか、と。今回、本欄で紹介した4名の方のお話をうかがいながら感じたことでした。

今回は「原爆の図」をめぐる聞き取り調査でありました。しかし、そこから見えてくるのは、焦土を体験することのなかった戦後の桐生の街の様相、そこに醸成していった戦後桐生の美術や文化活動の動向です。

これからもう少し視野をひろげながら、引き続き、戦後まもない時代の桐生の美術について取材、調査をすすめてゆくつもりです。

このたびの取材にご協力いただいた相澤千恵子様、林和子様、三村蓉子様、山口昇様、当時を知る人をご紹介くださった石内都様、山鹿英助様、貴重な資料を寄せてくださった川嶋伸行様に謝意を表します。

(当館学芸員)